

## 札幌市における動物介在教育（AAE）の実態と課題 －モデル動物介在教育（AAE）の探究－

今野 洋子\* 尾形 良子\*

### 抄 録

現在、子どもの心を育てる教育として、動物介在教育が注目されている。本研究では、札幌市内の全公立小学校を対象に実施した郵送による質問紙調査（回収率41.9%）から、動物介在教育の実態と課題を捉えた。また、2009年9月、動物介在教育推進校を訪問して実施した聞き取り調査および文献等から、推進校の実践と推進のための方法について分析した。その結果、以下の諸点をとらえることができた。

1. 「動物介在教育（AAE）」ということばについて知っている者は約2割と少なかった、また、動物愛護教室の活動は、ほぼどの学校も取り入れておらず、今後も実施する予定がなかったことから、「動物介在教育の推進を目指す国際的動向」とは大きく異なる札幌市の実態を把握できた。

2. 動物介在教育の一環である「動物飼育」は、9割以上が必要性を感じており、札幌市内の小学校では8割を超えて実施されていた。「動物飼育」の目的として「生命の大切さに気づかせる」が約9割、「思いやりの気持ちを育てる」「動物をかわいがる気持ちを育てる」は約6割、「責任感を育てる」「豊かな感

受性を育てる」「ふれあいを体験させる」は約5割に見られ、動物飼育への期待が大きいことが考えられた。

3. 動物飼育の目的と効果に着目すると、最も大きなねらいである「生命の大切さに気づかせる」に関しては、「生命の尊さを実感できるようになった」「生き物の気持ちを考えるようになった」が2割程度であり、この目的に達することは難しいことがうかがえた。飼育の目的と期待する効果から、介在動物もしくは飼育動物の選定が必要であることが推測された。

4. 困難点として「長期休業中の飼育」が8割を超えた。しかし、長期休業の世話を苦痛に感じない動物好きな教師が率先して動物飼育を行うことが困難点の解消につながるものが推測され、動物介在教育の推進校で、一教員が学校犬の世話全般について責任を持っていることが参考になると考えられた。

5. 近隣の専門家について4割程度しか連携がなく、学校側の取り組みの不足や努力不足が指摘された。推進校では、動物介在教育を進める上で、学校犬のしつけのために、保護者の理解を得るために、パディ・ウォーカーの育成のために、妊娠・出産を通していのちの大切さを伝えるために等、目的に応じて、

---

\*北翔大学

キーワード：動物介在教育、動物飼育、推進

専門家を活用して、その効果を得ており、この実績に学ぶ必要がある。

6. 推進校において「相棒・仲間・友達」の意味を込めて名づけられた学校犬バディは、子どもたちと様々な体験を共有しながら、ほんとうの「相棒・仲間・友達」に育っている。この例に学ぶことで、今後、札幌市において、学校犬の誕生は十分可能であり、改めて「動物介在教育(AAE)」が学校本来の機能を回復させる大きな力となることが考察された。

## I. はじめに

近年、社会の変化に伴い、核家族化・少子化の進行は、命の誕生を身近に知ることのない子どもたちを生み出した。同時に、ひとの死を切実に理解できない子どもたちをも生み出している。

その一方で、犬や猫などの愛玩動物が家族の一員としての位置を占めるようになり、現代の子どもにとって、動物はきょうだいのような、家庭における身近な存在になっている。

子どもにとってだけでなく、現在、動物は「ペット」の枠を超えて、人間と深い絆で結びつけられるようになり、「人生の伴侶」としての動物として「伴侶動物(コンパニオン・アニマル)」という呼称が用いられるようになった。1995年9月、ジュネーブで開催された「人と動物との相互作用国際学会(IAHAIO: International Association of Human-Animal Interaction Organizations)」において、「学校の授業にコンパニオン・アニマルに関する教育を取り入れ正しい動物とのふれあい方を通じて、子供たちの心の成長に欠かすことのできない動物の大切さを児童教育に

活かす」<sup>1)</sup>ことが決議された。

2007年10月、東京で開催された「人と動物の相互作用国際学会(IAHAIO)」において、学校カリキュラムにコンパニオン・アニマルを介在させる「動物介在教育(AAE: Animal Assisted Education)」を推進することが提言された<sup>1)</sup>。学校における「動物介在教育(AAE)」プログラムが子どもの道徳的、精神的、人格的な成長を促し、さまざまな場面に動物を介在させることで学習能力等が向上する等の効果<sup>1)</sup>が認められてのことである。

なお、「動物介在教育(AAE)」とは、2001年リオデジャネイロで開催された「人と動物の相互作用国際学会(IAHAIO)」において、「学校において動物と接する活動」と定義され、主に、獣医師やボランティアなどで構成されるチームが小中学校へ動物を連れて訪問することを通して、子ども達に動物とのふれあいを推奨し愛護精神を培う教育と、学校での動物飼育とを総称したものである<sup>1)</sup>。また、同2001年には、「動物介在教育実施ガイドライン」が宣言<sup>1)</sup>された。

これまで述べたような国際的および国内的動向を踏まえ、本研究では、北海道札幌市における「動物介在教育(AAE)」の実態を把握し課題を明らかにすること、推進校に学び「動物介在教育(AAE)」の可能性を探ることを目的とした。

## II. 対象および方法

2008年12月～2009年1月、札幌市内の全公立小学校を対象に、郵送による質問紙調査を実施した。回答にあたっては、1校につき1名が代表として回答するよう依頼した。

なお、倫理的配慮として、質問紙および資料送付依頼時に①学校個々の結果を公表しないこと、②学校名および個人名を明らかにして比較を行わないこと、③データの保管方法や研究終了後の処理について明記して、了解を得た場合、返信を依頼した。

203部郵送し、回収数85部（回収率41.1%）、うち有効回答数は85部（有効回答率100%）であり、これらを分析対象とし、SPSS ver. 14を使用し、検定についてはt検定を用いた。

なお、質問内容によっては回答数が異なるものがあることから、質問ごとに回答数を示すこととする。

また、モデル動物介在教育の探究のため、動物介在教育推進校の訪問調査も併せて実施した。

2009年9月14日（月）・15日（火）、2003年度より学校犬バディによる動物介在教育を推進している立教女学院小学校を訪問し、担当者である吉田太郎氏への聴き取り調査・子どもたちおよび保護者へのビデオ撮影で収録した観察内容をまとめた。

なお、吉田氏の実践の記録である「子どもたちの仲間 学校犬バディ 動物介在教育の試み」<sup>2)</sup>、バディの学校生活の様子についてのブログ「動物介在教育の試み Animal Assisted Education」<sup>3)</sup>、HP「Child Resarch Net 子どもは未来である」のレポート「動物介在教育（Animal Assisted Education）の試み」<sup>4)</sup>、DVD「Animal assisuted Education St.Margaret's Elementary School Buddy 2003-2009」<sup>5)</sup>についての概要も加えた。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 対象校および対象者の属性

##### (1) 対象校の特徴

対象校の児童数（N=84）は、「400～700名未満」39校（46.4%）、「100～400名未満」37校（44.0%）と中規模および小規模の学校が多く、100名未満は2校（2.4%）、700名以上は6校（7.1%）であった。

対象校の校区（N=85）は、商業地域60校（70.6%）が最も多く、次いで住宅地域19校（22.4%）、農業地域9校（10.6%）、観光地域4校（4.7%）であった（複数回答含む）。

##### (2) 対象者の属性

調査対象者の職掌（N=85）は、「総務または教務等の主任」28名（33.0%）、「教頭」25名（29.4%）、（学級担任ではない）教諭」25名（29.4%）が主たるもので、他に「保健主事」4名（4.7%）、「教諭（学級担任）」3名（3.5%）であった。

管理職や主任が多かったことから、対象者の勤務年数（N=85）は、「25～30年未満」41名（48.2%）、「30年以上」18名（21.2%）、「20～25年未満」17名（20.0%）と20年以上が多く、20年未満は「20～25年未満」17名（20.0%）、「5～10年未満」3名（3.5%）、「5年未満」2名（2.4%）であった。

#### 2. 対象者の動物への興味関心および飼育経験等

##### (1) 対象者の動物に対する気持ち

対象者自身の動物の好悪（N=85）については、「好き」18名（21.2%）、「どちらかというが好き」51名（60.0%）で合わせて8割以上が動物好きであり、「どちらかという嫌い」14名（16.5%）、「嫌い」2名（2.4%）

と動物嫌いは2割弱であった。

対象者自身の動物飼育経験 (N=85) について、「現在、動物の飼育担当者である」26名 (30.6%)、「これまでに勤務校で動物飼育を担当した経験がある」56名 (65.9%) で、飼育担当者として関わったことがある者は過去・現在を含めると9割を超えた。

「現在、担任している学級で動物を飼育している」2名 (2.4%) であったが、対象者のうち学級担任は3名であったことから、3名中2名が学級で動物を飼育していた。

家庭での動物飼育については、「現在、家で動物を飼育している」34名 (40.0%)、「これまでに家で動物を飼育した経験がある」37名 (43.5%) であり、自分の家で動物の飼育経験がある者は過去・現在を含めると8割を超えた。

「動物飼育経験は全くない」という者は4名 (4.7%) であり、動物と関わったことのない者は少なかった。

## (2) 対象者の動物介在教育 (AAE) の理解と動物飼育の必要性

「動物介在教育ということば」について (N=85)、「詳しく知っている」者は一人もいなかった。「知っている」19名 (22.4%) と2割程度しか知っている者がおらず、「あまりよくわからない」42名 (49.4%)、「わからない」24名 (28.2%) であった。

なお、対象者自身の動物の好悪と「動物介在教育ということば」の認知については関連が見られ、動物が好きな者 (n=69) のうち24.6%が『動物介在教育』ということばを「知っている」のに比べ、動物を嫌いな者 (n=16) では12.5%であった (表 参照)。

一方、学校での「動物飼育の必要性」につ

いては (N=82)、「必要」23名 (28.0%)、「どちらかという必要」53名 (64.6%) と合わせて9割以上が必要と答えており、「どちらかという必要ではない」6名 (7.3%)、「必要ない」2名 (2.4%) であり、不必要という者はごく少数であった。

「動物飼育の必要性」について、対象者自身の動物の好悪との関連が見られ、動物が好きな者 (n=69) のうち94.2%が「必要」と答え、動物を嫌いな者 (n=16) では68.8%が「必要」と答えていた (表 参照)。

## 3. 動物介在教育 (AAE) の実態

### (1) 動物飼育の状況

学校での動物飼育状況 (複数回答) について (N=85)、「学校全体で飼育している」70校 (82.4%)、「学級の中で飼育している」32校 (37.6%) と学校全体あるいは学級の中での動物飼育が多く見られたが、動物を「飼育していない」学校が10校 (11.8%) あった。

「学校全体で飼育している」動物の種類 (複数回答) は (N=70)、多い順から「ウサギ」56校 (80.0%)、「魚」47校 (67.0%)、「鶏 (チャボ含む)」17校 (24.2%)、「カメ」11校 (14.2%) であり、「ハムスター」「アメリカザリガニ」「コオロギ」「カブトムシ」が1校 (1.4%) ずつであった。

動物飼育状況について、対象者自身の動物の好悪別に見た結果、「学校全体」での飼育では動物が好きな者 (n=69) の82.6%、動物を嫌いな者 (n=16) 81.3%にみられ、「学級」での飼育は動物好きの39.1%、動物嫌いの31.3%にみられ、有意差はみられなかった。

### (2) 動物愛護教室の状況

「動物愛護教室のような活動」について

(N=85)は、「取り入れている」および「取り入れていないが次年度に予定している」学校は1校も無かった。また、「取り入れておらず、今後の実施予定はない」83校(97.6%)であった。さらに、「無回答」が2校(2.4%)であったことから、対象校のほぼ全てにおいて、「動物愛護教室のような活動」の実施業績および実施予定が全く無いことがわかった。

#### 4. 動物介在教育への期待と効果

##### (1) 動物飼育の目的

「学校における動物飼育の目的」(複数回答)は(N=85)、多い順から「生命の大切さに気づかせる」76校(89.4%)、「思いやりの気持ちを育てる」52校(61.2%)、「動物をかわいがる気持ちを育てる」49校(57.6%)、「責任感を育てる」44校(51.8%)、「豊かな感受性を育てる」42校(49.4%)、「ふれあいを体験させる」42校(49.4%)、「生物との関わり方についての見方・考え方を養う」35校(41.2%)、「世話をする喜びを味わう」35校(41.2%)、「飼育体験をさせる」27校(31.8%)、「動物に興味を持たせる」25校(29.4%)、「観察する態度を養う」23校(27.1%)、「世話の大変さに気づかせる」19校(22.4%)、「自然についての見方・考え方を養う」14校(16.5%)、「授業に利用する」14校(16.5%)、「動物の性質・習性について気づかせる」13校(15.3%)、「協調性を養う」5校(5.9%)、「目的を意識したことはない」3校(3.6%)、「課外活動に利用する」1校(1.2%)であった。

「動物飼育の目的」について、対象者自身の動物の好悪とで違いが見られた。生命の大切さに気づかせる」は、動物が好きな者(n

=69)も動物を嫌いな者(n=16)も約9割であったが、それ以外は動物好きな者のほうが多かった(表参照)。

##### (2) 動物飼育の効果

動物飼育によって得られた「児童のよい変化ついて」(複数回答)は(N=75)、多い順から「動物をかわいがるようになった」39校(52.0%)、「動物の世話をよくするようになった」38校(50.7%)、「動物に興味をもつようになった」33校(44.0%)、「協力して世話ができる」25校(33.3%)、「よく動物を観察する」「世話の大変さがわかる」が24校(32.0%)ずつ、「責任感が強くなった」23校(30.7%)、「世話をすることが喜びになった」20校(26.7%)、「生命の尊さを実感できるようになった」「生き物の気持ちを考えるようになった」が17校(22.7%)ずつ、「感受性が豊かになった」16校(21.3%)、「動物の話が子ども同士の共通の話題になった」12校(16.0%)、「心安らぐようになった」「優しさが引き出されるようになった」10校(13.3%)ずつ、「動物の生態を理解するようになった」「動物の生態がわかる」8校(10.7%)ずつ、「交友関係が和やかになった」4名(5.3%)、「自尊心が高められた」2校(2.7%)であった。一方、「特に変化なし」4校(5.3%)、「その他」2校(2.7%)に「動物飼育によるものか因果関係がわからない」「世話は、教職員の当番制で、子どもには触れさせてないので変化がわからない」という回答も見られた。

しかし、動物飼育によって「悪い方に変化した」(複数回答)ことについて(N=75)では、「世話のことでももめるようになった」5校(6.7%)、「世話を嫌がるようになった」

「集中できなくなった」「動物への興味関心が薄くなった」が1校(1.3%)ずつと少なかった。「その他」15校(20.0%)では「悪い変化はない」が11校(14.6%)であり、「動物飼育によるものか因果関係がわからない」「鳥インフルエンザの感染の問題、ネズミの発生で、子どもに近づけない体制となった」等が挙げられた。

なお、「児童のよい変化」について、対象者自身の動物の好悪とで違いが見られた。「動物をかわいがるようになった」で、動物を嫌いな者(n=16)の方が動物が好きになる者(n=69)よりも上回ったが、他の項目では、動物が好きになる者(n=69)のほうが多かった。

### (3) 目的と効果との相関性

動物飼育の目的と効果について関連する上位項目を取り上げて、比較した。

「生命の大切さに気づかせる」76校(89.4%)に対し、「生命の尊さを実感できるようになった」「生き物の気持ちを考えるようになった」が17校(22.7%)であった。「思いやりの気持ちを育てる」52校(61.2%)では、該当する項目がないが、「動物をかわいがる気持ちを育てる」49校(57.6%)については、「動物をかわいがるようになった」39校(52.0%)であった。「責任感を育てる」44校(51.8%)に関し、「動物の世話をよくするようになった」38校(50.7%)であった。「豊かな感受性を育てる」42校(49.4%)について、「感受性が豊かになった」16校(21.3%)であり、「ふれあいを体験させる」42校(49.4%)について該当する項目はないが、日常の世話や観察を含めて考えることができるであろう。

## 4. 動物介在教育を進める上での困難点

### (1) 動物飼育の困難点

動物飼育に関する「困難点」(複数回答)について(N=75)、多い順から「長期休業中の飼育が大変である」52校(69.3%)、「動物が死亡した時の処理に困る」「土日の飼育が大変」31名(41.3%)、「動物のけがや病気をしたとき困る」30校(40.0%)、「餌の確保に苦慮している」18校(24.0%)、「飼育宿舍の掃除が大変」17校(22.7%)、「動物が原因で子どもが感染したら困る」16校(21.3%)、「糞尿の始末に困る」15校(20.0%)、「アレルギー児童の指導に苦慮する」14校(18.7%)、「飼育宿舍の修繕が大変である」9校(12.0%)、「悪臭がする」4校(5.3%)、「飼育方法がわからない」「動物とふれあうことについて児童に具体的にどう指導していいかわからない」2校(2.7%)、「その他」4校(5.3%)であり、「近所の特定の人からのクレームがある」「餌ねらいのねずみの発生に苦慮している」等が挙げられた。

なお、最も困難な点となった「長期休業中の飼育」に関して、対象者が動物好きかどうかで差がみられ、動物を嫌いな者(n=16)は80.0%が困難としていたのに対し、動物が好きになる者の好きになる者(n=69)では66.72%であった(表参照)。

### (2) 近隣の相談機関

対象校の近隣にある「動物飼育について相談できる専門機関または専門家」(複数回答)について(N=85)、「動物病院」42校(49.4%)が最も多く、次いで、「市役所または区役所」21校(24.7%)、「獣医師」16校(18.8%)、「大学」3校(3.5%)、「その他」6校(7.1%)であり、「その他」には札幌市内にある円山動物園や動物管理センター等が挙げられた。

一方、「相談できる人や機関を知らない」18校(21.2%)、「相談できる人や機関がない」3校(3.5%)であり、2割以上が相談しにくい環境にあった。

## 5. 学校犬バディによる動物介在教育の概要

### (1) 学校犬バディ誕生にいたるまで

2002年春、立教女学院小学校の宗教科(聖書科)主任教諭、吉田太郎氏が不登校となっていた児童の学校への復帰を目指して関わっている時、児童が「学校に犬が学校にいたら、楽しいだろうなあ…」とつぶやいた。このことばが学校犬バディを誕生させる契機となった。

「不登校になってしまう子どもにとっては、

ともすれば学校という場所は友達との人間関係や勉強、競争などで疲弊してしまう場所でもあるのだ。そんなときでも、大好きな犬と一緒にであれば心強いし、安心できる。休んでいた学校にもう一度足を運ぶ勇気をくれる。子どもたちの不安や緊張を和らげ、『たのしみ』や『やさしさ』を与えてくれる存在として犬が学校にいてくれれば、きっと救われる子どもたちがたくさんいるだろう。そんな思いから『学校に犬を…』というアイデアが生まれた<sup>2)</sup>。実現させるまでに、校長との話し合い、専務理事の了承、教員会議での提案と承認というプロセスに加え、学校犬の犬種を選択、入手準備等、多くの過程を経た。さ

表1 動物介在教育の実態

項目		全体(%)	動物が好き(%)	動物が嫌い(%)
動物介在教育	知っている	22.4	24.6	12.5
	あまりよく知らない	49.4	49.5	50.0
	知らない	28.2	26.1	32.5
動物飼育	必要	28.0	30.4	12.5
	どちらかというが必要	64.6	63.8	56.3
	どちらかというが必要でない	7.3	2.9	25.0
	必要でない	2.4	1.4	6.3
動物飼育の目的	生命の大切さに気づかせる	89.4	89.9	87.5
	思いやりの気持ちを育てる	61.2	66.7	37.5
	かわいがる	57.6	62.3	37.5
	責任感を育てる	51.8	53.6	43.8
	感受性を育てる	49.4	52.2	37.5
	ふれあいを体験させる	49.4	52.2	37.5
子どものよい変化	かわいがるようになった	52.4	50.0	60.0
	世話をよくするようになった	50.7	53.3	40.0
	興味を持つようになった	44.0	48.3	26.7
	協力して世話ができる	33.3	30.0	46.7
困難点	長期休業中の飼育が大変	69.3	66.7	80.0
	死亡時の処置に困る	41.3	40.0	41.7
	土日の飼育が大変	41.3	40.0	41.7
	動物のけが・病気が困る	40.0	40.0	40.0

らに、ブリーダー探しから入手にいたるまで、また、日常および休日の世話は全て吉田氏が責任を持って担当している。決して、犬好きの先生が自分の犬を学校に連れて行っているわけではない。

2003年3月11日生まれのエアデール・テリアの雌は、バディ (Buddy) の名をもらい、学校犬となった。バディは、男の子の名前であるが、「相棒・仲間・友達」を示すことばである<sup>2)</sup>。

2003年5月26日より、学校犬としてデビューし、子どもたちとともに歩んできた (写真1参照)。

### (2) 子どもたちにとってのバディ

バディは、教員室の一角の専用部屋、通称「バディ・ルーム」で過ごしている (写真2参照)。

バディの世話は、6年生の有志が当番制で朝の餌やり・排泄の世話、部屋の清掃などを分担している。彼らは、「バディ・ウォーカー」と呼ばれ、ボランティアグループとしてバディの学校生活のサポーターをしている。「バディ・ウォーカー」の活動は「飼育」ではなく、バディが学校生活を送るための「お手伝い」をすることが目的である。毎年、25～35名 (学年の約半数) が在籍しているが、正式メンバーとなるためには、ドッグトレーナーによるハンドリング講習会の受講、犬の扱い方や日常のケアについての学習が条件である。協力しながら大型犬のハンドリングを修得し、悪戦苦闘しながらも、散歩中の排泄物の処理やトラブルなどへの対処を行っている。また定期的にドッグトレーナーの指導を受け、簡単な服従訓練などにも積極的に取り組みながら、バディとの信頼関係を築いている (写真3参

照)。

吉田氏が「相棒・仲間・友達」の意味を込めて名づけたバディは、子どもたちと様々な体験を共有しながら、ほんとうの「相棒・仲間・友達」に育っている。

吉田氏担当の聖書科の授業には、バディが毎時間参加している。授業のはじめにはバディは一人一人のもとを周って挨拶を交わす。授業中、バディは教室の隅に置かれたドッグベットの上で子どもたちの様子を見守り、時折、寝入っている。バディがいることで、子どもたちの注意力が散漫になることはない。「動物の持つぬくもりを間近に感じることで安心感やリラックス効果が得られ、かえって授業への集中力が高まる」<sup>2)</sup>。(写真4参照)

日常の授業や日常の学校生活のみでなく、前項に述べたようなキャンプや保護者会への参加の他、運動会やクリスマス会などにも参加をしている。

### (3) いのちのつながり

「動物介在教育」について学内での認知度が高まり、軌道に乗り始めた2006年4月、学校犬バディは初めての出産に挑戦した。早い段階から子犬も学校へ登校させ、バディ・ウォーカーの子どもたちを中心としながら、子犬育てを体験させた (写真4)。

授業の中でも、クラス担任と一緒に、低学年の生活科や総合といった時間を利用して獣医師をゲストティーチャーとして迎え、聴診器で子犬の心音を聞いたり、ワクチンの接種を手伝ったりする体験学習を行った<sup>3)</sup>。

子犬の出産という出来事は、子どもたちに、いくら言葉を尽くしても実感することの難しい「いのち」への感性を伝えるものであった。ぬいぐるみのようにかわいい子犬たちを抱き



上げたときのぬくもりや重さ、日に日に成長する生命力の強さを感じ、子どもたちにとっては「いのち」に触れるという忘れられない貴重な体験となり、バディの出産は、まさに「いのち」を実感する取り組みとなった。

2009年、吉田氏は、後継犬にはバディと血のつながった犬がいいという教員や子どもたちの強い希望を受け、バディの二度目の繁殖に挑戦した。

吉田氏は、思案の末、全クラスの授業にバディを連れて行き、子どもたちみんなにバディが授乳する様子などを見せた。6年生の授業では獣医師の協力のもと、バディの妊娠中に教室で超音波検査を行い、お腹の中の胎児を見ることができた。また、出産直前の巣づくり行動、出産シーンでは子犬を包んでいる羊膜をはがし、へその緒を上手に噛み切って、産まれたばかりの子犬を舐めてやりながら呼吸を促す様子などをビデオ撮影し、「いのち」の誕生の瞬間を子どもたちと共有した<sup>3)</sup>。

音を立ててお乳を飲む子犬たちの懸命に生きようとする姿や、我が子を慈しむような眼差しで見つめる母親としてのバディから、子どもたちは多くのことを感じ、学んだことであろう。

二度目の出産で誕生した5匹のうち、リンクちゃんがバディとともに、立教女学院小学校に毎日通っている（写真5）。

#### Ⅳ. 考 察

##### 1. 「動物介在教育（AAE）」に期待する「生命の大切さを気づかせる」こと

「動物介在教育（AAE）」ということばの認知について知っている者は少なく、特に、動物愛護教室の活動は、ほとどの学校も取り



写真1 本の表紙



写真2 バディルームでブラッシング



写真3 バディ・ウォーカーの働き



写真4 授業の前にはバディが子どもたちの机を回ってご挨拶。笑顔が溢れる教室。



写真5 バディの赤ちゃんを抱っこ



写真6 バディとリンクちゃん

入れておらず、今後も実施する予定がなかったことから、「動物介在教育の推進を目指す国際的動向」とは大きく異なる札幌市の実態を把握できた。

しかし、動物介在教育の一環である「動物飼育」について、9割以上が必要性を感じており、実際に札幌市内の小学校では8割を超えて実施されていることが把握できた。また、「動物飼育」の目的として「生命の大切さに気づかせる」が約9割、「思いやりの気持ちを育てる」「動物をかわいがる気持ちを育てる」は約6割、「責任感を育てる」「豊かな感受性を育てる」「ふれあいを体験させる」は役5割に見られ、動物飼育への期待が大きいことが考えられた。

一方、動物飼育の目的に対してどのような効果が得られたかをみると、「動物をかわいがる気持ちを育てる」や「責任感を育てる」目的に対して、ほぼ狙い通りの効果を得られたことが読み取れた。しかし、最も大きなねらいである「生命の大切さに気づかせる」に関しては、「生命の尊さを実感できるようになった」「生き物の気持ちを考えるようになった」が2割程度であり、この目的に達することは難しいことがうかがえた。

動物飼育による子どもの悪い変化はほとんどみられなかったことから、動物飼育はある程度の効果を上げられるものと考えられるが、新学習指導要領の柱のひとつでもある「自他の生命尊重する心を育てること<sup>6)</sup>」へのアプローチとしては不十分といわなければならない。このことの原因として、飼育動物の種類が関連しているのではないかと推測した。学校全体で飼育している主な動物は、「ウサギ」8割、「魚」約7割であり、他は「鶏



写真7 子犬たちをラジオフライヤーに乗せて教室をまわる。



写真8 初登校の頃のバディ。生後2カ月半。

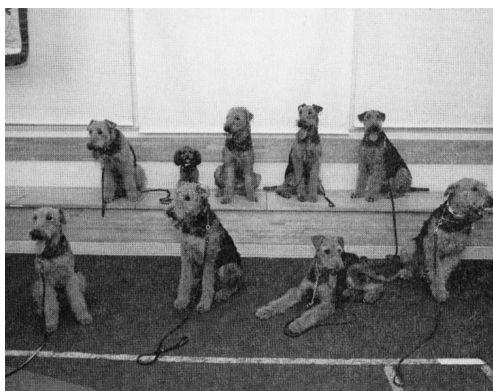


写真8 バディ（上段左）と成長したバディキッズたち。〔撮影〕浜田一男

（チャボ含む）「カメ」「ハムスター」「アメリカザリガニ」「コオロギ」「カブトムシ」であった。これらの動物種は、人間からの働きかけに対する反応が明らかでなく、コミュニケーションをとることが難しいことから、生命尊重の気持ちが湧くような対象ではないことが考えられた。動物飼育に関して、動物種の選定とその効果に過度の期待を抱くことは禁物<sup>7)</sup> という意見もあるが、飼育の目的と期待する効果を考えるなら、動物種の選定および介在動物もしくは飼育動物の個体としての選定は必要である。

動物介在教育推進校での学校犬バディについては、「気性が穏やかで人になつきやすいこと」「訓練性能が高いこと」を条件に、数百種類を超える犬種の中からエアデール・テリアを選び、日本で一般的に繁殖されているものでなく、旧東ドイツから輸入した血統で日本警察犬協会でも優秀な訓練成績を修めている親犬の子を得た<sup>2)</sup> ののである。

## 2. 「動物介在教育（AAE）」の困難点の解消のための方策

困難点として8割を超えて挙げられたのは「長期休業中の飼育」であった。動物飼育を行うにあたって、少なくとも1日に1度見回することは、命への対応の基本<sup>8)</sup> であり、夏休みや冬休みの長期休業中でも、世話が必要である。このような困難点への解決方法として、長期休業の世話を苦痛に感じない動物好きな教師が率先して動物飼育を行うことが困難点の解消につながると考えられた。この点に関しても、動物介在教育の推進校では、吉田氏がバディの世話全般について責任を持っている。

困難点として、動物の「死亡時の処理」や

「けがや病気」等が挙げられたが、これらについては、教員が責任を持って世話をすることに加え、専門家の協力が不可欠である。動物の健康を維持し、子どもに健康上の不安を与えないためにも、毎日の清掃、餌を適切に与えるなどの「日常の管理」が重要である<sup>8)</sup>。しかし、動物の死は避けられないものであり、けがや病気についてもやむを得ないこともある。動物の死亡に対し、獣医師や専門家と連携して対応する方が良い<sup>8)</sup>。

近隣の専門家について2割程度しか連携がなく、専門家や機関を知らないという回答がみられたが、市役所の係や市内の動物園もあり、獣医学部を要する大学もある。札幌市内では一つの区に30件以上の動物病院があり、動物愛護団体やボランティア、民間のペットシッター等、相談のできる専門家は多い。それにも関わらず、専門家や専門機関との係わりが薄いことは、ひとつには学校側の取り組みの不足、努力不足といわなければならない。

吉田氏は、動物介在教育を進める上で、バディのしつけのために、保護者の理解を得るために、バディ・ウォーカーの育成のために、妊娠・出産を通していのちの大切さを伝えるために、専門家を活用し<sup>2)</sup>、その効果を得ている。

病気については、1998年に哺乳類や小鳥などのレプトスピラ症や鳥インフルエンザなど動物から人にうつる人獣共通感染症が問題になった。このように、人へ感染する恐れがあるために動物を敬遠する学校も増えたことから、学校では動物の病気などに困難を感じていることがうかがえた。しかし、動物にワクチンを接種するなど、動物が病気にかからないよう予防し、動物と接するときには節度あ

る接触に努めることで、多くの人は人獣共通感染症を予防することができる<sup>6)</sup>。推進校においても、アレルギーを持つ子どもも在籍しているが、注意を払いながら、楽しくバディとふれあっている<sup>2)</sup>。この他にも、推進校の取り組みに学ぶことは大きい。

## V. おわりに

本研究では、札幌市内小学校において「動物介在教育(AAE)」の理解や推進が十分なまま、ただ動物飼育が盛んに行われている実態を把握し、改善すべき課題が山積していることが示された。

しかし、実際に動物飼育での動物と子どもの関わりにより、「動物をかわいがる」態度は醸成されており、一定のよい効果を得ることができていることから、このような教育効果に着目し、さらに推進すべきであると考えられた。また、札幌市内にある地域の専門家をもっと活用すべきであり、動物介在教育においても開かれた学校とはいえないことが把握され、これも課題のひとつといえよう。

動物好きな教師、動物介在教育のよさを実感する教師がリーダーシップをとり、動物介在教育を積極的に推進することが望まれる。

## 【謝 辞】

お忙しい時期にも関わらず、訪問調査をさせていただきました吉田太郎氏はじめ立教女学院小学校の皆様、バディさん・リンクちゃん、質問紙調査にご協力くださいました札幌市内立小学校の教職員の皆様に心から感謝申し上げます。

## 【付 記】

本研究は、平成21年度私立大学等経常費補助地域共同研究北方圏学術情報センター研究費の助成を受けて実施した。

## 【引用文献】

- 1) コンパニオンアニマル・リサーチ：人と動物の関係学：<http://www.caric.org/j/relation.index.html>
- 2) 吉田太郎：子どもたちの仲間 学校犬バディ 動物介在教育の試み，高文研，2009
- 3) 動物介在教育の試み Animal Assisted Education , <http://blog.livedoor.jp/schooldog/>
- 4) 動物介在教育（Animal Assisted Education）の試み，Child Resarch Net 子どもは未来である，[www2.crn.or.jp/blog/report/01/50.html](http://www2.crn.or.jp/blog/report/01/50.html)
- 5) DVD 「Animal assisuted Education St. Margaret's Elementary School Buddy 2003-2009」
- 6) 文部科学省：平成元年版学習指導要領，1998
- 7) 森裕司，奥野卓司：ヒトと動物の関係学 第3巻 ペットと社会，岩波書店，2008
- 8) 鳩貝太郎，中川美穂子（2003）：「教職研修合特集 No157 学校飼育動物と生命尊重の指導」，pp. 74-113

The problem of Animal Assisted Education (AAE) in Sapporo City  
: Search for model AAE

Yoko IMANO Ryoko OGATA

**ABSTRACT**

The animal assisted education is paid to attention as an education that raises child's mind now. In the present study, the realities and the problem of the animal assisted education were caught from the questionnaire investigation (recovery percentage 41.9%) by mailing executed for all public primary schools in the Sapporo city. Moreover, the method for practice and promotion of the promotion school was analyzed from the hearing survey and the document, etc. that visited the animal assisted education promotion school and executed it in September, 2009. As a result, the following some points were able to be caught.

1. "Animal breeding" that was the part of the animal assisted education felt the necessity by 90 percent or more, and was executed by 80 percent or more of the Sapporo city in the elementary school aiming at "The importance of the life is noticed" etc.
2. In "Animal protection classroom" that was the part of the animal assisted education, it was not executed at all almost the schools, and the percentage of those who knew the word animal assisted education in detail was less than 20 percent.
3. Cooperation with the specialist in the vicinity was about 40 percent, and lack and effort shortage of the approach of the school were pointed out. It is necessary to learn to this results of cooperation with the specialist in the promotion school.
4. School dog Buddy who put the meaning of "Mate, companion, and friend" in the promotion school and had been named is growing up in true "Mate, companion, and friend" while sharing children with various experiences. It was considered that school dog's birth became big power to which it was very possible, and "Animal assisted education (AAE)" recovered a function the school original again by learning to this example in Sapporo City in the future.

**Key words** : Animal Assisted education, animal breeding promotion